

経験の内在的原理についての一考察

——根本的経験論と超越論的経験論の比較を通じて——

藤坂大佑

はじめに

ウイリアム・ジェイムズとジル・ドゥルーズの哲学の間に存する近似性は度々指摘されている。例えば、ドゥルーズの弟子で、ジェイムズ研究者であるダヴィッド・ラブジャードによる、純粹持続の理論を発するドゥルーズ＝ベルクソンのな一義的平面を出立点として描かれるジェイムズ哲学の解釈、ナタリー・ドゥプラズによる、超越論的経験論としての立場を取る哲学者の系譜に、ドゥルーズらと共にジェイムズの名を挙げる見方などが主な例として挙げられる⁽²⁾。また、ドゥルーズによる概念創造の理論や問題主義との関連において、ドゥルーズ哲学にプラグマティズムの思想としての側面を見出すことも可能である⁽³⁾。

本稿は、ジェイムズが展開する「根本的経験論」とドゥルーズ

ズが展開する「超越論的経験論」という二つの異なった経験論的観点における解釈から、両者における経験の内在的原理についての比較検討を行い、それを通じて得られる、経験の発生の根幹部に迫るアプローチに関する問題点について再考することを目的とする。

こうした目的を設定する理由は二つある。第一に、方法論として基盤に据えられている「経験論」的な視点を通して形成される経験（ないしは生）の在り方において、両者の理論が相互補完的な形で関わり合うものであることを確認し、それを通じて、両者の経験基盤の成立に関する新たな解釈を加えることが可能であると考えられる為である。第二に、アメリカを代表するプラグマティストとしてのジェイムズ像に対し、いわば根源的経験への問いを展開させた哲学者としてのジェイムズ哲学の解釈にこそ、ドゥルーズの超越論的経験論に対する「現実的な

もの」から生の潜在性へのアプローチを試みるひとつの応答として、その独自の意義が見出され得ると考えられるのである。

以上を通じて、最終的に両者それぞれの「経験論」とは、経験の発生が問題となる場面において、「潜在的なもの」ないしは「現実的なもの」という両側面から生（ないしは経験）の在り方を問う思想であることが理解される。ジェイムズとドゥルーズの哲学を比較する様々な試みにおいては、ジェイムズの思想が有するプラグマティックな面、ないしは純粹経験の自己展開の記述から見出される創造性の場面が、しばしば強調される。しかし、その基盤となる両者の根幹的なアプローチは、別の仕方でありながらも共に「内在的な捉え難い生」を把握しようとする試みなのであり、そのパースペクティヴに関する相違点を明確にしてこそ、両者の理論の展開がいかなる性格を有するものであるかが理解されるであろう。以上の点を、本稿を通じて検討してゆきたい。

一 ドゥルーズによる超越論的経験論の理論構成

——経験の超越論性を巡って——

超越論的経験論は、通常の経験の成立とは別様の仕方、経験の発生・成立が論じられるドゥルーズ哲学全体の根幹を成す理論として提示される。本節においては、その問題設定の基盤を成す、能力の経験的使用と超越的使用という区別において、ドゥルーズが超越論的な「経験」と呼ぶところの経験領野の射

程を見定め、その理論構造を概観する。

超越論的経験論が論じられる際に念頭に置かれていることは、カント哲学に対する形式性の批判である。ドゥルーズはカントが超越論哲学において展開した経験の条件を論じる方法では評価しつつも、その経験の可能的条件となるものの描写が徹底性を欠いており、経験論的なものの「引き写し」に陥ってしまっている点を批判する。こうしたカント哲学の欠点に對して、ドゥルーズはヒュームの経験論哲学を基軸とし、経験の原理の「発生への問い」を補う形で理論を展開させる。こうした問題設定に基づく超越論的経験論においては、その名称において示されている「超越論的なもの」についての描出が、理解のための基軸となる。

現実経験の条件となる超越論的なものを経験論的視座から語ろうとするのは、一見すると相矛盾する企てのように思われる。しかし前述の通り、経験の成立条件を述べる為には、ある種の超越論的な視座を組み込む必要性があり、それによってドゥルーズは経験の内在的条件としての潜在性を描くことを試みるのである。

例えば、ドゥルーズによる「超越論的」という語の使用について、ピーター・ホルワードは次の様に述べている。

ドゥルーズが超越論的という語を用いる場合、それ自体としての創造性、現働的または個体的なものに課される諸々の制限から差し引かれた創造性の描出を目的とする。した

がって「超越論的」とはまさしく、その創造の内在性における、そして被造物へのその併合「の下に潜む」、それ自体において存在する限りでの前個体的現実の描写である。この箇所における「超越論的」という表現は、「超越的」という表現とは明確に区別される。ホルワードによると、経験を俯瞰的に捉えることで述べられるような、経験の外的条件についての解釈は、生成される実在の意味の規定作用として定位されてしまい、最終的に経験を形式的に捉える道へと陥ってしまう。つまり、経験から超越する外的条件に依拠しつつ、経験の構成を捉えるという方法を取ってしまうと、ドゥルーズ哲学全体に示される、潜在性としての実在のリアルな姿は捉え得ないのである。

この点を踏まえてドゥルーズは、「超越的なもの」に対する視点を排しつつ、潜在的な経験の内在性に準拠しながら経験領野の描出を試みるのである。それはラプジャードが「根拠の同一性形式にとつて代わるのが、無底の自由な差異である」と論じるところの、ドゥルーズ哲学に通底する規定され得ない潜在的な差異の様相として提示されるものである。

以上論じた様な経験に対する視座から、超越論的経験論においては「リアルな経験」の成立を提示することが目的とされる。しかし、徹底的に潜在的な視座から展開される超越論的経験論によつて示される「リアルな経験」とはいかなる経験だろうか。これは『差異と反復』において論じられる、「能力の超越的行

使」にまつわる問題と共に提示される。

ドゥルーズは『差異と反復』において、能力の「超越的行使」と「経験的行使」を区別して独自の能力論を展開する。ここでの「超越的」という表現は、前述のような「世界の外の対象に向かう」という意味での「超越的」ではなく、通常の形式的な経験に定位する視座では決して捉え得ない、「能力が世界に生み出される根本的な場面」を描き出すという意味で使用される⁽⁶⁾。ドゥルーズによると、能力は経験的使用の場においては、「常識＝共通感覚 *sens commun*」の下で統制されている。それは、感性・想像力・悟性が協和的に働くことで、あらかじめ想定されていたものの「再認 *reognition*」に基づき、安定した経験である。これに対して超越論的経験論においては、前述の通り、同一性の形式の統制から逃れ、経験的な使用における把握では捉え得ない「能力の発生」が強制されるプロセスが論じられる⁽⁷⁾。

以上の能力の経験的使用と超越的使用の区別を前提とし、前者によつて生じる再認の経験とは別様の、非再認的な経験、つまり、未知のものと出会うような実在的な経験から、既知のものからの従属を逃れる「思考の発生」の問題が主題化される。この思考の発生の問いから、経験の根底に存する潜在性にもつわる議論がやがて具体化されるのだが、本稿ではこの問題には深入りせず、「超越論的な、諸制限から差し引かれた前個体的な内在性から能力の発生を根源的に問う」という超越論的経験

論の根幹的な視座の確認に留めておきたい。

超越論的経験論においては、経験における形式性を徹底的に排し、経験の真の姿の把握と発生の問題への遡及が最終的に指されるのである。以上の点においては、素朴な通常の経験の在り方と、その潜在的な在り方が明確に区別されていることが理解されるだろう。

二 根本的経験論の構造と方法

——「内的生」の視座から⁽⁸⁾——

前節で概観した超越論的経験論の視座に対して、ジェイムズは具体的な経験を理論の土台としながら、経験の根源性について論じる。根本的経験論の方法や形而上学的な理論としての純粹経験の世界観等について論じられた論文をもとに編纂・出版された『根本的経験論』の中で、ジェイムズは自身の経験論的立場の表明や哲学的問題に関する解釈と同時に、経験主体の「生」に関する独自の主張を行っている。本節においては、その点を踏まえてジェイムズにおける具体的な経験における根幹的な「生」への問いに対する基本的な態度について概観する。

方法論としての根本的経験論は、「経験されるものを全て実在的なものとみなす」、あるいは「経験を額面通りに受け取る」という言葉で表現されるように、経験の流れに徹底的に根差すことが、その記述の前提となる。⁽⁹⁾ こうした基本的性格を有する根本的経験論は、経験同士の関係性を重視し、分離的であれ接

続的であれ、それらを平等に経験的なものと見なすこと、そしてそれが特に「内的生 inner life」にとつての「感⁽¹⁰⁾ feeling」に依拠して展開すること、という二つの要点を軸として展開される。

第一の要点、つまり経験同士の関係性に重点を置く見方は、「主知主義批判」としての性格を有して展開される。例えばジェイムズは、経験を統制するような絶対者を想定する合理的思想、また、経験同士の分離的な面を強調し、経験を統制の無い分離的な事物のようなものと見なす経験論的思想を、それぞれ「ある種の知性作用によって経験の本質をとらえ損ねている思想である」とし、経験の根源的な把握によって、それらの調停を目論むのである。こうした経験に対する視座から、ジェイムズは諸々の主知主義者に対して、経験と情動的状态が本来的に有している多様性を軽視している、という批判を展開するのである。

しかし、そうした批判的態度のみならず、ジェイムズの主張において見出されるのは「内的生」のいわゆる「カオス的な在り方」についての独自の視点である。経験の多様性を重視する立場から展開されるカオス的な生の在り方とはいかなるものであるか。ジェイムズは以下のように述べる。

多元論において、我々が実在の構成について認めるように要請されることは、我々自身が有限な生のあらゆる最小部分において、実際に経験的に生じているのを見出すものだ

けである。つまり、いかなる実在的なものも絶対的に単純ではなく、経験のどの最小の断片も多元的に関係しあう包摂的な多を有しており、その関係のいずれもが、それが捉えられる仕方、あるいは他のものを捉える仕方、一側面、一性質、一機能であるということである⁽¹⁰⁾。

我々の経験は潜在的な関係性を有しつつ展開するものであり、一切のものを包含する実体的なものを措定するような経験の統一的な把握は、生成しつつある生に主眼を置くことによって排除される。すなわち、経験は「何かになりつつあるもの」としてのみ捉えられるのである。

では、こうした生とは如何にして存在し、把握され得るのであろうか。これが二点目の「内的生」の把握において試みられる。ジェイムズの論じる生の連続的な在り方は、ベルクソンの主張する持続的な生に関する主張を受け入れる形で展開される⁽¹¹⁾。こうした経験の連続性について論じた文脈のなかで、ジェイムズは次のように述べている。

我々各人の内にあつて、現在、直接的に現前している内的生の脈動 pulse は、それ自身が、小さな過去、小さな未来、我々自身の身体の小さな意識、互いの人格の小さな意識であり、あるいは、我々が語ろうとしている諸々の気高さ sublimities、地球の地理、歴史の向き、真理と誤謬、善と悪、その他述べ切れない様々なものについての小さな意識である⁽¹²⁾。

内的生の脈動は、これらすべてのものを感じており、互いに帰属しあっているものとして論じられる。ジェイムズは、こうして捉えられる生が展開し構成する世界観に「モザイク哲学」という呼称を与える。それは、様々な経験同士の間によって示される、モザイクアートのような多元的な経験が織り成す世界観であるが、これについてジェイムズは次のように説明する。

「もちろん、こうした比喩は誤解を招くだろう「……」しかしこの比喩は、経験それ自体が、大きな全体として、その縁に沿って成長することを象徴するのに役立つ。経験の一瞬が推移によって次の一瞬へと増加し、连接的であれ離散的であれ、経験の糸 experiential tissue を延ばしていくということは否定しえない、と私は主張する⁽¹³⁾」。ジェイムズによれば、生とはまさに推移であり、そこにおいて我々は回顧的に生きると同時に、展望的に生きていく。そして、過去・現在・未来という経験同士の間での連続的な推移の関係を、経験同士の間での相互認識を可能にする。こうした展開に基づいた純粹経験において構成される自己の経験は、生の流れとして常に自己の内において捉えられるのである。

三 根源的経験に対する視座の相違

—— 経験の潜在性を巡るパースペクティヴについて

ジェイムズとドゥルーズは、各々の視座から、形式的な経験に対する根源的な経験へ遡及する態度を示した。しかし、前節

までにおいて概観した両者が展開する理論構造からも理解されるように、その態度にはひとつの大きな相違点が存している。これは、両者の方法的なアプローチの相違から生じたものであると考えられる。

経験に根差しつつも、その原理となる超越論的な経験領野を探求し、発生の問題を主題化したドゥルーズに対し、ジェイムズはドゥルーズと比べると、「経験されるものを全て実在するものとみなす」という素朴な態度から経験に注視し、その根源性を問うている。共に同じ形式性を逃れる経験の實在的な姿を捉える、という問題意識を有していたにもかかわらず、ジェイムズが、ドゥルーズが対象とする超越論的な領野まで遡らなかつたのはなぜか。例えば鈴木泉は、ドゥルーズとジェイムズの問題意識の共通性を踏まえたくて次のように論じている。

「日常的な経験とは異なる、構成以前のリアルな経験を繊細な眼差しでもって記述し、情性化して日常の手垢にまみれた経験とは異なる鮮烈なる経験のしなやかな変貌を絶えず見つめることに専念する、という道——言い換えれば、超越論的経験論抜きの高次の経験論、ないしは根元的経験論〔*radical empiricism*〕——もある」¹⁴。

鈴木が指摘するように、ジェイムズの根本的経験論とは、ドゥルーズが探求するような、素朴な経験に対する超越論的な領野を軸として展開されるものではない。ジェイムズはあくまで個人的な生活の記録の材料となる「知覚の流れ」と表現され

る主観的な経験に定位しながら経験の只中における変化について論じるのである。こうした両者における「高次の経験論」の視点についての相違は、以下のドゥルーズの記述からも理解できる。「内在が、もはやそれ自身とは別のものに対して内在的でない時に、内在平面について語ることが可能となる。そのような平面は恐らくある根本的な経験論〔*empirisme radical*〕であろう。それは、主体の内在的な体験の流れ、自我に属するようなものの中で個別化する様な体験の流れとして示されるものではない」¹⁵。ここで論じられている「内在平面」とは、最晩年の著書、『哲学とは何か』において、哲学者の内である概念が創造される次元としての根源的な「思考のイメージ」として示されるものである¹⁶。経験の超越的な領野としての絶対的な内在性について述べられる晩年の論考「内在——ひとつの生」において、ドゥルーズは内在平面を「超越論的領野〔*champ transcendantal*〕と呼んでいるが、そうした超越論的領野とは、「非人称的な意識」として論じられる。通常の経験の流れから逸脱し、経験的な視点では捉え得ない意識の根源性まで遡り、主体性から逃れる形で、経験の原理が最終的に問われるのである。

一方、ジェイムズの場合はどうであろうか。先に名を挙げたラプジャードは、純粹経験をドゥルーズの論じるころの内在平面にジェイムズが付した名称であるとしたうえで、次のように述べている。

織物 fabric のイマージュがジェイムズにおいては絶えず繰

り返される。純粹経験の織物が存在する——この説明として、ドゥルーズとガタリは次のように述べる。「内在平面は絶えず織り上げられる巨大な杼である」。ちょうど彼らにとって内在平面が「限界のない（一者—全体）」として定義されるように、ジェイムズにおいては、純粹経験は「曖昧な二元論 monisme vague」として提示される⁽¹⁷⁾。

ラプジャードによると、純粹経験は多数の「道筋／進路」を包含しており、経験の成立とは、その潜在性から実現への移行を意味している。この経験の潜在性から実現へのプロセスが、ジェイムズ哲学においては最終的に、第二節で論じたモザイク哲学としての多元的世界観へと具体的に結実するのである。

しかし、モザイク哲学とはあくまで経験領野の内に多様なものの存在を認める、すなわち、経験論を多元論として捉えるということの意味するのみであって、根本的経験論の本質を指し示す表現であるとは言い切れない。純粹経験の世界においては、前述の通り、経験の「分離的關係」および「接統的關係」という關係性を平等に実在的に見なすという点から経験領野が見定められる。この關係性は経験に対して「親密な關係」か「疎遠な關係」であるか、と言い換えることが出来るものである。それは伊藤邦武が「世界は一つの拡がりの全体として時間とともに変化していく。その拡がりとは意識の領野であり、ジェイムズの言葉でいう『談話の宇宙 (the universe of discourse)』である。この談話の宇宙のなかで無数の経験が生まれたり消えたり

り、強調されたり忘れ去られたりしている」と述べているように、主観的な意識の流れを拡張した世界観を基軸としている。また、こうした世界観においては、純粹経験同士の関係性によって物理的關係・精神的關係・認識的關係が形成されると論じられており、これらの事実は経験の次元で理解・承認されねばならない⁽¹⁸⁾。

こうした見方に基づき、全体を秩序立てて把握する形式的な経験の在り方ではなく、経験の部分同士の関係性に注視する具体的な経験の在り方によって、純粹経験の世界の成り立ちが示される。ジェイムズが、経験における因果作用が「世界の塵 (dirt of the world)」にまみれて存在すると表現している点から示されるように⁽¹⁹⁾、それは現実的な経験を形式的な制限されたものとして捉えるのではなく、その具体性に注視してこそ展開される。一見すると単なる実用主義的発想とみられるプラグマティズムの思想も、ジェイムズ哲学の視座から捉えられた、単純には汲み尽くし得ない現実経験の豊饒さから経験の展開の方向性を示す理論として扱われるのである。

以上の内実を踏まえると、内在平面の哲学と純粹経験の哲学は、共に経験の内的原理へ遡及する「高次の経験論」として示されるとは言え、その理論的展開の場として据えられる経験領野が異なっていることが理解されるのではないだろうか。超越論的経験論と現実経験がいかにして両立し得るか、という問題は重要な課題としてドゥルーズ哲学には残されているか⁽²⁰⁾、これ

に対して根本的経験論は、まさに現実経験に準拠しつつ形式性を逃れる「高次の経験論」の視座を組み込むことで、経験の实在性を示す存在論的立場の形成を企図しているのである。冒頭で論じたように、ドゥルーズとジェイムズの哲学は多元的な価値観を認める理論として捉え得る為、実践的場面におけるプラグマティックな観点による比較においても有益な意義が見出される²²。しかし、本稿で行った経験の内的原理を巡る二側面としての両者の経験論の解釈によって、そうした展開を可能とするような経験の根源性についても、改めて問われるべき深意が存していることが示されるのではないだろうか。

おわりに

ここまで根本的経験論と超越論的経験論が有している方法論的特徴、そして純粹経験という多元的宇宙の根本素材、および内在平面という極地をひとつの起点として見出される経験の原理について、雑駁な形となつてしまつたが概観した。ジェイムズとドゥルーズにおいては、「根源的な」経験論的視点から把握される内的原理を軸として展開される独自の方法論が、それぞれの思想形成の立脚点の特質を明示している。経験を巡る「現実的なもの」と「潜在的なもの」の非類似性が強調される形で、ドゥルーズの超越論的経験論においては後者が強調されることで、その発生を問う視点から経験の構造が問題とされた。そして、ジェイムズの根本的経験論とは、まさに前者を徹

底的に捉える視点から、ドゥルーズとは異なつたアプローチによつて経験の内的原理を捉えようとした営みであると言えるのではないだろうか。しかし本稿では、その可能的な道筋が呈示されたに過ぎない為、両者の哲学全体を通じて問われる経験の潜在性の具体的な内実については、今後更なる検討が必要だろう。

ジェイムズは『プラグマティズム』において以下のように論じている。「我々個々人にとつて重要な哲学とは、技術的な方法ではない。それは、多かれ少なかれ、生が純粹に根深く意味していることについての、我々の低次の感覚「dumb sense」なのである[……]哲学とは、宇宙全体の圧力 push と緊張 pressure を、理解し感じる我々の個人的な方法なのである」²³。このような、一見すると素朴な哲学の営為に関する基本的態度を示す主張も、その奥底の潜在的な在り様へと遡及する方向性へ辿つてゆくと、経験の内在的原理は「現実的なもの」と「潜在的なもの」を巡つて展開される道筋を包含していることが理解されるのである。

(1) Cf. David Lapoujade, *William James, Empirisme et pragmatisme*, Paris: Le Seuil, 2007, surtout pp.33-40.

(2) Cf. Natalie Depraz, *Lucidité du corps : de l'empirisme transcendantal en phénoménologie*, Dordrecht: Kluwer Academic, 2001, surtout pp.206-212.

(3) 山森はドゥルーズにおける非本質的問題主義から見出されるヴィ

ジョンを「ドゥルージアン・プラグマティズム」と称し、昨今の研究動向を踏まえつつ理論の展開可能性について論じている（山森祐毅「ジル・ドゥルーズの哲学 超越論的经验論の生成と構造」人文書院、二〇一三年、一九六—二〇六頁を参照）。

(4) ビーター・ホルワード『ドゥルーズと創造の哲学 この世界を抜け出す』（二〇〇六年）松本潤一郎訳、青土社、二〇一〇年、一六七頁。

(5) ダヴィッド・ラブジャード『ドゥルーズ 常軌を逸脱する運動』（二〇一四年）堀千晶訳、河出書房新社、二〇一五年、七一頁。

(6) 例えばカントは『純粹理性批判』において、「理念」に対応する対象を規定するような理性の超越的使用を批判しているが、ドゥルーズはカントの能力論を基本的には踏襲しつつも、むしろ能力は「経験から超出した形」で行使される場合にこそ、その固有の能力が発揮される、という点から理論を展開するのである。両者における超越的行使をめぐる議論については、山森、前掲書、五八—五九頁を参照。

(7) Gilles Deleuze, *Difference et Répétition*, Paris: Presses Universitaires de France, 1968, pp.186-187.

(8) 本節の内容は、「アメリカ哲学フォーラム第3回大会」（二〇一六年、於：京都大学）での拙発表報告「根本的经验論の構造からみる生と創造性の考察」における考察に基づく。

(9) William James, *Essays in Radical Empiricism*, New York: Longmans, Green, and Co., 1912, (abstr. ERE), pp.42-44.

(10) William James, *A Pluralistic Universe*, New York: Longmans Green and Co., 1909, (abstr. PU), p.322.

(11) 例えば、『多元的宇宙』第7講「経験の連続性」においてジェイムズは、直接的で名付け得ない段階にある経験の豊かさを指摘したヘルクソンの方法に則り、「感覚的生のより根源的な流れ」を見ようとする。しかし一方で、ヘルクソンはジェイムズが「心理学原理」で論じた「意識の流れ」と自身の持続概念が混同して理解されるのを

頑なに拒んでいた。こうした両者間の近似性・及び相違点の比較に関しては、加國尚志「ヘルクソンと英米の哲学者—ジェイムズとの交友—」『現代の哲学』西洋哲学史二千六百年の視野より」渡邊二郎監修、哲学史研究会編、昭和堂、二〇〇五年を参照。

(12) PU, pp.286-287.

(13) ERE, pp.86-87.

(14) 鈴木泉「現代フランス哲学における超越論的经验（論）—ドゥルーズの場合—」『現代の哲学』西洋哲学史二千六百年の視野より」二五五頁。

(15) Gilles Deleuze, Félix Guattari, *Qu'est-ce que la Philosophie?*, Paris: Les Éditions de Minuit, 2005, p.49.

(16) 同上、六八頁。「思考のイメージ Image de la pensée」とは、「差異と反復」および「哲学とは何か」において、「哲学者が概念を創造する際に暗黙裡に前提としてしまっている思考の出立点（方法以前の根本的な前提）」として提示される根本的な概念である。

(17) David Lapoujade, "Du champ transcendantal au nominalisme ouvert William James", Sous la direction de Eric Alliez, Gilles Deleuze : une vie philosophique, Institut Synthélabo, 1998, p.269.

(18) 伊藤邦武「ジェイムズの多元的宇宙論」岩波書店、二〇〇九年、一五四頁。

(19) 同上、一五二頁。

(20) ERE, p.186.

(21) 鈴木、前掲論文、二五六—二五七頁。

(22) Cf. Sean Bowden, Simone Bignall and Paul Patton (Eds.), *Deleuze and Pragmatism*, New York: Routledge, 2014.

(23) William James, *Pragmatism: A New Name for Some Old Ways of Thinking*, New York: Longmans, Green, and Co., 1910, p.4.
(ふじさか・たすく、哲学、東洋大学大学院博士課程)